



「聖☆対談」で晴佐久昌英神父(右)と救いについて話し合った社会学者の宮台真司氏

# 「プロテスタントは御利益の臭い」

## 宮台真司氏 晴佐久昌神父と「救い」トーク

いのり☆フェス

9月14日、東京・早稲田奉仕園スコットホールで「いのり☆フェスティバル2013」が開かれた。教派・学校などの枠にとられない自由な立場の有志実行委員会による教会・団体・個人などのためのフリーマーケットとして2011年から始められたイベント。協賛はキリスト新聞社、いのちのことば社出版部、日本聖書協会、後援にはドン・ホスコ社、カトリックメディア協議会、伝道団体連絡協議会、虚無山彼岸寺、フリースタイルな僧侶たち、と多種多様。

宮台氏は社会学のほかに権力論、国家論、宗教論、性愛論など多岐にわたる分野で著書も多い。一方の晴佐久氏も司祭として働きながらエッセイなどを発表して話題を集めている。会場には特定の宗教を持たない人をはじめ、カトリック、プロテスタント、仏教徒、イスラム教徒などさまざまな宗派の人が集まり会場は満員だった。

宮台氏は日本の「救い」について「ぼくは映画の批評もしますが、日本人は映画のハッピーエンドを要求、救いのない終わりを嫌います。宗教に対しても同じように思えます。もともとこのキリスト教は利益がありませんが、日本でキリスト教が広がらないのは、このご利益がないからだと思えます。」

これについて晴佐久氏は「救いをみんなが求めているなら、宗教を問わず誰もが救われていいのではないのでしょうか。普遍的な救いがあるはずですよ」と発言。司会者が「それは晴佐久さん個人の意見ですか? それともカトリックの意見としてとっていいのでしょうか?」と聞くと、「わたしは意見は時々過激すぎるから、質問に2人が応答した。その中のひとつ、なせこの世には悪があるのか、震災などの悲劇はなぜ起きるのか」に宮台氏が応じた。

「これは昔からよくあがられる疑問のひとつです。人の善悪の尺度と神の善悪の尺度はまったく違う。神は絶対的な存在です。だから人が神の尺度をわかつて自己を無意味にし無理な善神がこの悪をつくら、悲劇が起きるのか、人がわかるわけがない。それを人がわかる必要もない、知る必要がありませんか?」と逆に会場に問いを投げかけた【フリーライター・中尾祐子】